

I 研究主題

未来を拓く子どもの育成（4年次）

～「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ学習指導の在り方～

II 研究主題について

1 「未来を拓く子ども」について

「未来を拓く子ども」とは、「生活や社会の中にある正解のない問題に向き合い、自らの学びを生かして、よりよい解決を追求し続ける子ども」である。

様々な活動の基盤となる知識、情報、技術が急速に変化する現代。今後、社会的変化は加速度を増し、子どもたちが生きていくこれからは、予測が一層困難な時代になると考えられる。このような時代の到来に対応するため、学校教育では教師による「教授」から、子ども自身による「学び」へと学習指導の在り方の転換が求められている。「学び」とは、学習者自らが主体となり、対話を通して新たな知識や価値を獲得・創造する営みを指す。「学び」を通して育まれる資質・能力は、未来の創り手である子どもたちにとって、よりよい社会と幸福な人生を切り拓く力となるだろう。

私たちは、この理念と本校の子どもの実態を鑑み、育成をめざす子ども像を「未来を拓く子ども」とした。そして、この子ども像を「生活や社会の中にある正解のない問題に向き合い、自らの学びを生かして、よりよい解決を追求し続ける子ども」と捉え、育成をめざすこととした。

2 研究の経緯について

「未来を拓く子ども」は、各教科等の問題解決的な学習を通して身に付けた資質・能力が備わることで育成される（図1）。本校では、平成28年度より本研究主題の下、各教科等において育む資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で捉え、その一体的な育成を目指して研究を進めてきた。

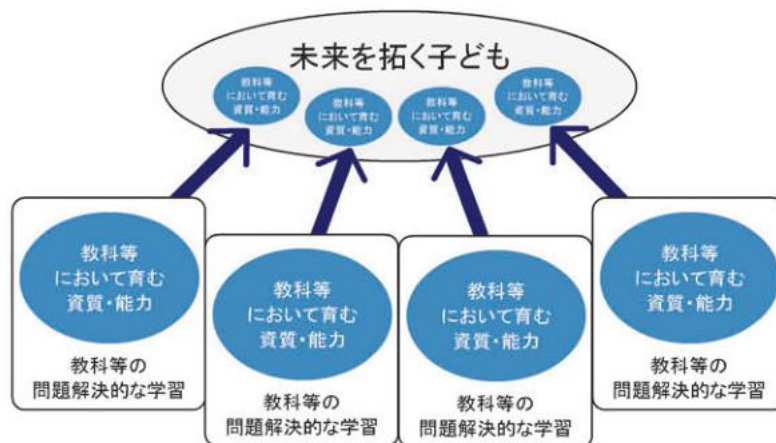


図1 「未来を拓く子ども」の育成イメージ

- 1年次は、「未来を拓く子ども」が備える資質・能力を各教科等で捉えた。そして、学習の中で資質・能力の三つの柱が相互に関係し合うことを活性化できるように、「子どもが繰り返し問い続けること」を視点として、各教科等の問題解決的な学習の過程を構想した。
- 2年次は、メタ認知の側面から資質・能力の育成に資するために、子どもが振り返りをすることで得られる「学びの自覚」を授業における子どもの姿で捉えた。そして、問題解決的な学習の各過程における「学びの自覚」を促す学習指導の工夫について、各教科等で具体化した。
- 3年次は、問題解決的な学習の過程において、問題解決への熱意・探究心をもって自らの考えを表出している子どもの姿を「躍動」と定義した（図2）。そして、子どもの「躍動」を促す学習指導の工夫の視点（図3）を基に、各教科で具体化した。「躍動」する子どもの姿を捉えることは、子

どもが資質・能力を活用・発揮する姿を見取ることにもつながり、指導と評価の一体化についても考察を深めることができた。

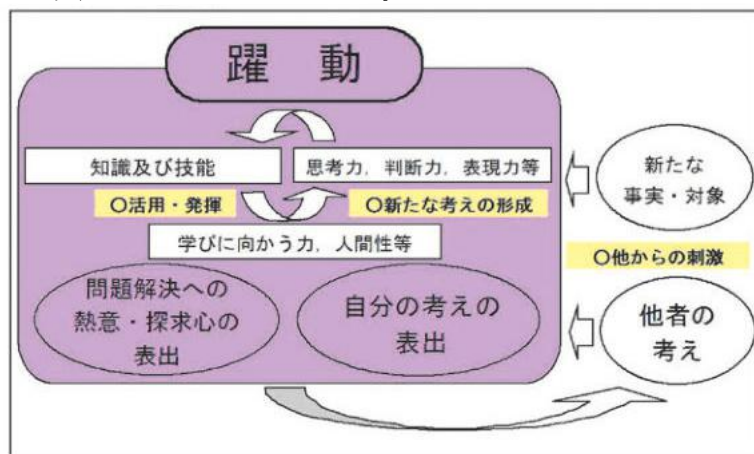


図2 子どもが「躍動」をする姿のイメージ

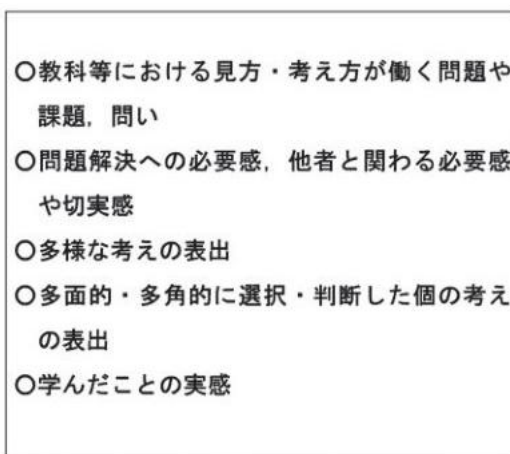


図3 「躍動」を促す学習指導の工夫の視点

なお、群馬県教育委員会では、小中学校の各教科等の問題解決的な学習過程と、各過程の学習指導の在り方を従来から示してきた。令和元年度には「はばたく群馬の指導プランⅡ」を作成し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からさらに内容を充実させた。本校では本指導プランに示された学習過程の設計や学習指導に関する基本的な考え方を重視し、さらに研究を進めていきたいと考える。

3 本年次研究の方向について

「未来を拓く子ども」が備える教科等において育む資質・能力の育成を図るため、教科等の問題解決的な学習の過程において「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿に着目する。

※「見方・考え方」とは…学びの深まりの鍵となる各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方のこと。

これまでの研究から、「躍動」をする子どもからは、単元・題材を通して進んで対象や他者と関わりながら自らの考えを発言したり、粘り強く解決を導いたりする姿が見られた。また、振り返り際には、仲間と協力して学んだ喜びや自信の高まりを言葉にする姿が見られた。このような主体的・対話的な学びの姿は、子どもが協働性を発揮する中で表出されることが明らかになった。

その一方で、社会や生活の中にある問題に対し、育んできた資質・能力を生かすことに難しさを感じる子どもの姿が見られた。その原因は、学びの「深さ」にあると考えられる。子どもが教科等を深く学び、事物・事象の原理や法則、概念、解決の仕方といった、より多様で複雑な問題にも対応できるような転移可能な概念的知識を獲得していくこと。また、子どもが学びを振り返り、教科等を学ぶ意義や価値を実感し、以後に生かそうとする態度を培うこと。このような「深い学び」の面からのさらなる授業改善を行うことが、「未来を拓く子ども」の育成に必要である。そこで、私たちは「学びの深まりの鍵」であり、教科等の「見方・考え方」の背景にある「教科等を学ぶ本質的な意義」を再考し、「見方・考え方」を働かせて学ぶ子どもの姿を追い求めることとした。

以上のことから、本年次は、問題解決的な学習の過程において「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿を捉え、その姿を生み出すことを目指して授業改善を行う。この取組は、各教科等における「主体的・対話的で深い学び」の姿を具体化する試みでもある。そして、研究主題「未来を拓く子どもの育成」を踏襲し、副主題を「『見方・考え方』を働かせて協働的に学ぶ学習指導の在り方」とし、次の研究目標及び、研究課題を設定した。

Ⅲ 研究目標

「未来を拓く子ども」が備える資質・能力の育成を図るため、各教科等の「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ学習指導の在り方について、実践を通して明らかにする。

Ⅳ 研究課題

- 各教科等の「見方・考え方」の背景にある教科等を学ぶ本質的意義とは、どのようなものか。
- 各教科等の問題解決的な学習の各過程において「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿とは、どのような姿か。
- 各教科等の「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿を生み出す学習指導の工夫とは、どのようなものか。

Ⅴ 研究内容

1 各教科等を学ぶ本質的意義と「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿

(1) 資質・能力を育む「見方・考え方」の働きと、各教科等を学ぶ本質的意義

「見方・考え方」は、子どもが問題解決的な学習の過程においてよりよい解決に向けて自らの考えを形成し、表出する際、資質・能力の三つの柱が相互に関係し合う推進力として歯車のように働くとされる（図4）。この「見方・考え方」の働きにより、子どもは「新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得する」ことや、「思考力、判断力、表現力等を豊かなものとする」こと、「社会や世界にどのように関わるかの視座を形成する」ことができる。つまり、「見方・考え方」が働くことで資質・能力はよりよく育まれる。また同時に、資質・能力が活用・発揮されることで「見方・考え方」は鍛えられるという相互関係にある。「未来を拓く子ども」の育成を図るためには、各教科等の学びを通して鍛えた各教科等の「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにする必要がある。

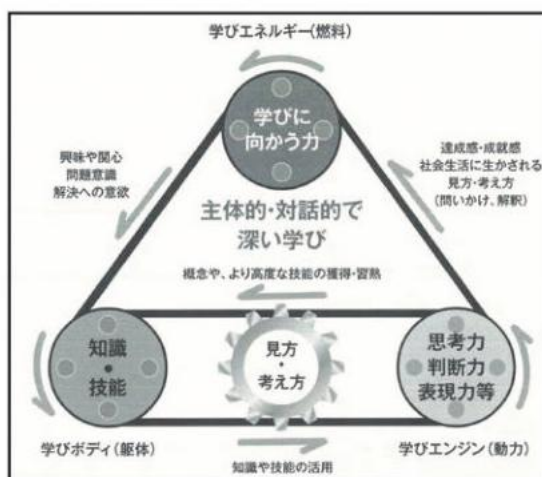


図4 資質・能力と「見方・考え方」の関係(澤井2018)

教科等の学習指導要領解説に示されている「見方・考え方」は、「当該教科等における主要なもの」であり、実際に単元・題材の学習で働かせる「見方・考え方」の具体については、学習内容に応じて柔軟に考えることとされている。そこで、教師は単元や題材の学習過程を設計する際に、働かせる「見方・考え方」を具体化するが、その際の指標となるのが教科等を学ぶ本質的意義である。

教科等を学ぶ本質的意義とは、子どもが当該教科等をなぜ学ぶのか、その学びを通じてどのような力を身に付けるのかという問いの答えにあたるものである。よって、教師は、この本質的意義に照らして単元・題材の学習過程を構想し、学習内容に応じて働かせる「見方・考え方」を具体化する。

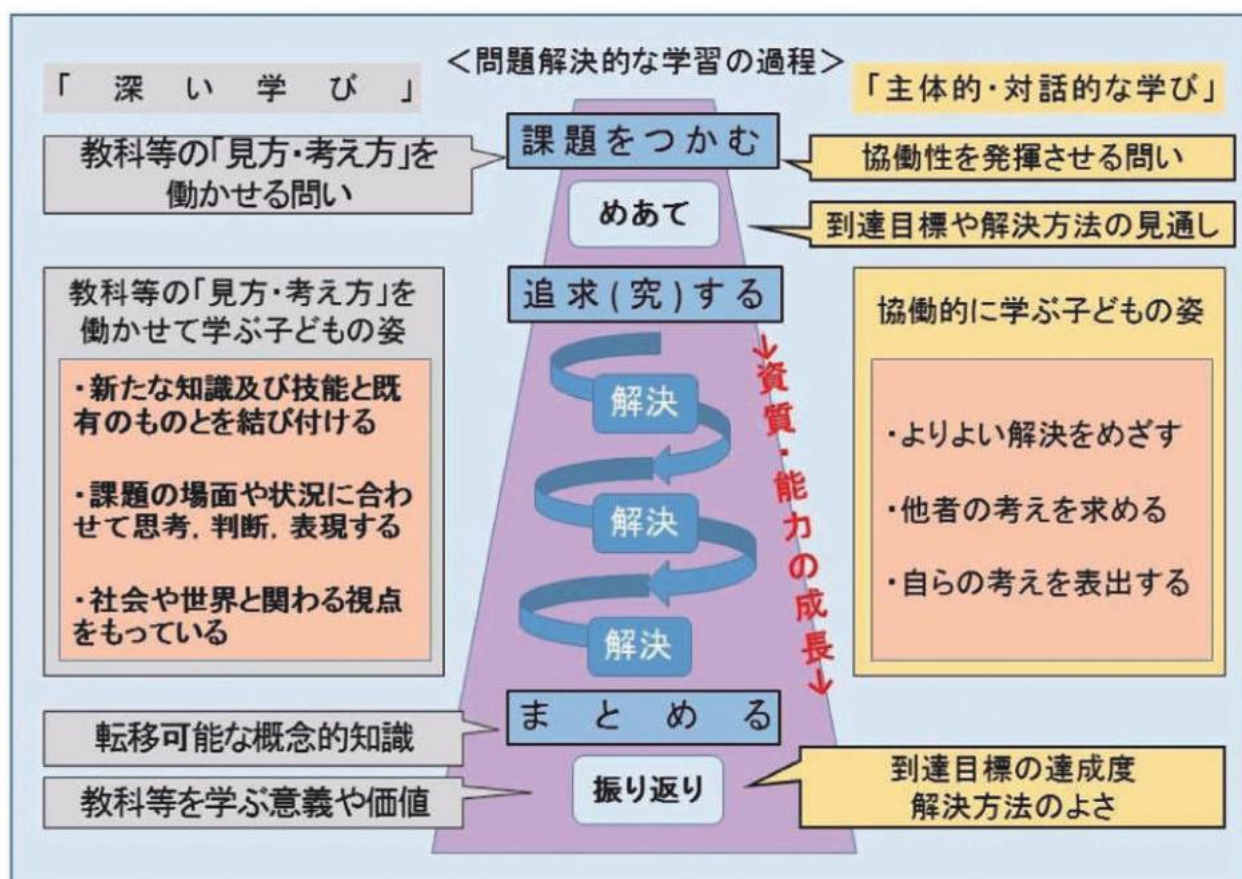
(2) 「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿

各教科等には主として「課題をつかむ」「追求(究)する」「まとめる」の3つから構成される問題解決的な学習の過程が存在する。教科等の資質・能力の育成を図るために、まずは教師がこの学習過程において教科等の「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿を想定する必要がある。

しかし、教科等の「見方・考え方」は、子どもに課題を与え、考えを形成させれば適切に働くというものではない。「見方・考え方」は子どもが転移可能な概念的知識を習得し、教科等を学ぶ意義や価値の実感に至る「深い学び」の過程があってこそ適切に働くのである。そこで、教師は教科等を学ぶ本質的意義に照らして、単元・題材の学習内容に応じた「見方・考え方」を働かせる問いを設定し、単元・題材を設計する必要がある。

子どもが「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ問題解決的な学習を設計する上で考慮すべき2つの側面がある。1つ目は、転移可能な概念的知識や教科等を学ぶ意義や価値、「見方・考え方」を働かせる問いといった「深い学び」の視点から見た側面である。そして2つ目は、問題解決への見通しや振り返り、協働的に問題解決に取り組む子どもの意識といった「主体的・対話的な学び」の視点から見た側面である。これら学びの2つの側面から「逆向き設計」論的に問題解決的な学習を設計することで、各教科等の「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿を捉えることができる。

そこで、各教科等では、以下に示す手順（図5）に基づき、2つの側面から問題解決的な学習の各過程における「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿を捉えていく。



- ①：単元・題材で育成を目指す資質・能力を明らかにする。
- ②：「まとめる」過程における転移可能な概念的知識や教科等を学ぶ意義や価値と、到達目標の達成度や解決方法のよさを自覚する子どもの意識を想定する。
- ③：「つかむ」過程において、概念的知識の獲得・創造に至る教科等の「見方・考え方」を働かせる問いと、到達目標や解決方法の見通しをもつ子どもの意識を想定する。
- ④：教科等の「見方・考え方」を働かせて学ぶ子どもの姿と、協働的に学ぶ子どもの姿を複数想定する。
- ⑤：④の2つの側面の姿を同時に表出する子どもの姿の具体を想定する。

図5 教科等の「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿を導く手順

2 各教科等の「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿を生み出す学習指導の工夫

学習には、学習の主体である自己と、関わり合う他者が存在する。それを支える学習上のルールがあり、さらに、解決すべき課題や、道具、学習形態、場等がある。教師はこれらの諸要素を組み合わせ、単元・題材の学習を設計し、資質・能力の育成を目指す。その上で、各教科等の「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿を生み出すためには、教科等の特質に応じた多様な学習指導の工夫を組み合わせ、講じていく必要がある。

各教科等においては、子ども一人一人の資質・能力の育成を図れるよう、教科等の特質に応じて先の諸要素の中から学習指導の工夫を構想する。その際、課題設定の工夫については単元・題材等学習全体における影響が大きいので、別項を立て、その他の指導上の工夫と分けて論じる。

〔課題設定の工夫〕

各教科の「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿の表出を促すためには、「見方・考え方」を働かせる視点（図6）と、協働性を発揮させる視点（図7）の2つの視点から課題設定の工夫をすることが大切である。その上で、子どもが課題を解決する必要感や切実感をもてるようにするためには、課題の文脈づくり（その課題が生じた背景や周辺の状況の設定）が有効である。各教科等においては、課題を設定する際に先の2つの視点を満たした上で、文脈づくりの要素（図8）の中から学習内容や教科特性に合わせて選択し、課題設定の工夫をしていく。

- 解決に至るまでに働かせる「見方・考え方」の明確さ
- 既存の「知識及び技能」とのつながりの見だし易さ
- 解決の必要感や切実感をもてる文脈づくり

図6 「見方・考え方」を働かせる問いの設定の視点

- ・何が解決の目的か
- ・子どもが担う役割は何か
- ・解決する相手は誰か
- ・想定されている状況はどのようなものか
- ・生み出すべき成果や作品は何か
- ・評価の観点は何か

図8 文脈づくりの要素

- 一人で解決することの困難さ
- 立ち場や判断の明確さ、その根拠の多面性・多角性
- 解決のために他者との合意形成の必要性

図7 協働性を発揮させる問いの設定の視点

〔道具や方法，活動形態，場など，その他の学習指導の工夫〕

各教科等の「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿の表出を促すため、各教科等はその特性に応じて道具や方法、活動形態、場等の学習指導の工夫を組み合わせたり、選択したりしていく。

道具や方法	活動形態	場
・情報機器 ・写真、映像や実物 ・思考ツール ・身体表現 ・実験や実技 ・可視化できる教具 ・学習プリント	・一斉 ・小集団・ペア ・ジグソー	・追究過程を想起できる場 ・追究過程を共有・比較する場 ・相互作用的な影響を受けあえる場

国 語	【言葉による見方・考え方】 対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に注目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めること
社 会	【社会的事象の見方・考え方】 位置や空間的な広がり，時期や時間の経過，事象や人々の相互関係などに注目して，社会的事象を捉え，比較・分類したり総合したり，地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること
算 数	【数学的な見方・考え方】 事象を数量や図形及びそれらの関係についての概念等に注目してその特徴や本質を捉え，目的に応じて数，式，図，表，グラフ等を活用しつつ，根拠を基に筋道を立てて考え，問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識及び技能等を関連付けながら，総合的・発展的に考えること
理 科	【理科の見方・考え方】 自然の事物・現象を，量的・関係的，質的・実体的，多様性と共通性，時間的・空間的などの科学的視点で捉え，比較，関連付け，条件制御，多面的に考えること
生 活	【身近な生活に関わる見方・考え方】 身近な人々，社会及び自然を自分との関わりで捉え，よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする
音 楽	【音楽的な見方・考え方】 音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活や文化などと関連付けること
図画工作	【造形的な見方・考え方】 感性や想像力を働かせ，対象や事象を，形や色などの造形的な視点で捉え，自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと
家 庭	【生活の営みに係る見方・考え方】 家族や家庭，衣食住，消費や環境などに係る生活事象を，協力・協働，健康・快適・安全，生活文化の継承・創造，持続可能な社会の構築等の視点で捉え，生涯にわたって，自立し共に生きる生活を創造できるよう，よりよい生活を営むために工夫すること
体 育	【体育や保健の見方・考え方】 運動やスポーツを，その価値や特性に着目して，楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え，自己の適性に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること
外国語	【外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方】 外国語で表現して伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること
道 徳	【道徳的な見方・考え方】 様々な事象を道徳的諸価値の理解をもとに自己との関わりで多面的・多角的に捉え，自己の生き方について考えること
特別活動	【集団や社会の形成者としての見方・考え方】 各教科の見方・考え方を総合的に働かせながら，自己及び集団や社会の問題を捉え，よりよい人間関係の形成，よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己の実現に向けた実践と結び付けること
総 合	【探究的な見方・考え方】 各教科における見方・考え方を総合的に活用して，広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え，実社会・実生活の課題を探究し，自己の生き方を問い続けること

各教科等の学習指導要領解説に見られる「見方・考え方」の説明【参考】